エコジン・インタビュー
[ecojin_interview]

種をまく人。日比野克彦

[写真／トビタテルミ]

アーティスト、日比野克彦さんが近年取り組んでいる「明後日朝顔（あさってあさがお）プロジェクト」。朝顔の種に想いをのせて運んでいくプロジェクトです。全国各地で収穫された種は、遠い地に運ばれ、またそこで花を咲かせる——。日比野さんは、種が持っている役割を活用して、アートという想像力の種をまいているのです。

東京の「21_21 DESIGN SIGHT」で今年3/16まで開かれた「200∞年 目玉商品」展にて。
収穫された朝顔のツルといっしょに。

エコジン vol.6
2008年5月号

デザイン
Tattaka、泉沢儒花（Bit Rabbit）

cover撮影
川井聡
太陽光発電は、CO_2を発生させないクリーンな
エネルギーとして注目を集めています（長野県佐久市）。

エコジン

5 月 号
[エ コ ジ ン]
Vol.6 May. 2008

CONTENTS

03 エコジン・インタビュー
日比野克彦「種をまく人。」
06 特集
新しいチカラ。
16 海外エコ事情
18 特集2
光化学オキシダント多発の謎
22 エコ・ジャーナル
24 エコ百科 [G8環境大臣会合]
26 エコジン・レポート [ストップ温暖化「一村一品」大作戦]
32 エコジン・アイ
33 エコ生活のもと
34 エッセイ 大江戸エコロ帖 第六回
「土に還る（1）下肥（しもごえ）を使う」 文／石川英輔
35 エコモノ

エコジンとは、“エコロジー＋人”、“エコロジー＋マガジン”のこと。環境のことを考える人が一人でも多くなることを目指す、環境省発信のエコ・マガジンです。
※本誌の掲載文のうち、執筆者の意見にあたる部分については、環境省の見解と異なることがあります。

2003年、新潟の里山を舞台に開かれる国際的な現代アート展「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」で、日比野さんは地元の人たちと、廃校になった小学校を朝顔で覆いつくした。これがプロジェクトの始まり。

朝顔の種をモチーフにしたクッションに座る日比野さん。

アートもエコも、「想像力」がカギになる。

アーティストは、困っていた。

今から5年前、新潟で開かれた「第2回越後妻有（えちごつまり）アートトリエンナーレ」でのことだ。これは、里山を舞台にした3年に一度の現代アートの「祭り」。彼に与えられた場所は、苅平（あざみひら）という人口200人の集落にある、廃校になった小学校だった。東京から作品を持ち込むのではなく、地元の人たちと一緒に作品を作り上げたい。それが彼の希望だった。しかし、住民の目は冷たかった。「わたしら、アートなんか分からんすけ」——。

ある時、荒れ放題かと思っていた廃校の花壇に、なぜか数本の花が植わっているのに、彼は気づいた。「東京からお客さんが来るっていうんで、植えといたんだよ」。地元のおばちゃんのささやかな気持ちに感動した彼は、あるプランを思いつく。

それじゃあ、一緒に花を育てることにしよう。展覧会は夏。だったら、花は朝顔がいい。軒先で育てるんじゃ、つまらない。小学校の屋根までロープを張って、校舎を花で覆い尽くしてしまおう——。日比野克彦さんの「明後日朝顔プロジェクト」は、こうしてスタートした。夏の終わりには、ツルは屋根まで到達。廃校は、花で覆われた。

しかし、プロジェクトはそこで終わらなかった。住民たちは、秋には種を収穫し、翌年からも朝顔の育成を続けていったのだ。さらに2005年には、茨城県の水戸芸術館で行われた日比野さんの個展にあわせて、美術館に300本のロープを張り、新潟生まれの朝顔の種を、苅平と水戸の人々が一緒に育てた。昨年は、金沢21世紀美術館でも朝顔づくりを行うなど、いま、「種」は全国へ蒔かれつつある。

「自分が愛でたい時だけ花を買ってきて楽しむっていうのは、考えてみたら勝手な話。花が枯れたら種を収穫し、その種を冬の間しっかり保管して、春になったらまた植える——そのサイクルが大切なんです。小さな種には、去年花を育てた時の記憶が詰まっていて、植物の生長とともに思い出も蘇ってくる。種にこめられた循環や持続性——それが、僕がこのプロジェクトでいちばん伝えたかったことです」

「昨日」の記憶がつまった種を「今日」咲かせると、「明日」の種が生まれる。種はその先の「明後日」まで、私たちの想像力を運んでくれる。

「僕は、アートで想像力は訓練できると思っています。時間は一方向にしか進まないけれど、想像力を使えば100年前も、100年先もイメージできる。環境問題にとっても、想像力は大きな力です。想像力がなければ、『今が良ければいいじゃん』『温暖化でホッキョクグマがいなくなったって、別に関係ないし』ってことになっちゃうでしょ？」

まだ見えない先の先の未来へと、想いをつなぐために——アーティストは、今年の夏も、想像力の「種」を咲かせる旅に出る。

2007年には、金沢21世紀美術館の周囲350メートルにロープを張りめぐらせ、約2,000本の朝顔を育てた。

日比野克彦（ひびの かつひこ）
1958年岐阜市生まれ。東京芸術大学大学院修了。在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催する他、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を活かしたワークショップを数多く行っている。
http://www.hibino.cc